中東情勢と日本・世界のゆくえ（2016年10月16日　栗田禎子）

★中東の現在の危機の根底にあるもの

　＝過去20数年間中東に対して行われてきた米主導の戦争

　　（湾岸戦争；アフガニスタン戦争、イラク戦争 …）

・「中東」という地域が経てきた歴史的経験（地政学的重要性＋石油．．．）

　　　冷戦後の世界と中東の「再植民地化」；「集団的帝国主義」

　・日本の軍事化と中東

　　　米主導の一連の対中東戦争、中東への介入と歩調を合わせる形で軍事化が進む

＝PKO法；「対テロ特措法」「イラク特措法」；「海賊対処法」；南スーダン．．．

　　　集大成としての「安保法制」

★いま中東はどのような状況にあるか

　　「転換点」があり得たとすれば「2011」だったが….

→　画期的動きだったがゆえに反革命の奔流（～現在）

＝混乱・流血を引き起こすことで再び先進諸国が介入できる状況を作ろうとする動き

　（「イスラーム主義」勢力支援や「宗派対立」煽動）

→　テロ・難民問題として欧米にもはね返り、「制御不能」状態となるが．．．

→それを名目にさらなる介入・戦争へ

　　　　　　　cf. 「イスラーム主義」をどう捉えるか（現代史の文脈；比較の視座 ….）

★わたしたちは平和のために何をすべきか？

どこで頑張るか？

　世界の中での日本の位置；「ＩＳ」と安倍政権とどちらが危険か？

平和憲法を軸としたたたかいの重要性（「平和憲法革命」）

平和憲法の世界史的意義

（＝日本国民の戦争体験、世界の諸国の反戦運動や「戦争の違法化」の思想、

侵略・植民地化に苦しんだアジア・アフリカの民衆の経験、が流れ込んでいる。

普遍的・人類史的テクストとしての平和憲法）

【参考文献】

・長沢栄治・栗田禎子編『中東と日本の針路――「安保法制」がもたらすもの』大月書店、2016年

・栗田禎子『中東革命のゆくえ――現代史のなかの中東・世界・日本』大月書店、2014年